BASSO CONTINUO 鈴木優人 SERIES バッソ コンティヌオ 10

公益財団法人
青山音楽財団
AOYAMA MUSIC FOUNDATION
KYOTO, SINCE 1980

ハナ・ブラシコヴァ ソプラノリサイタル

Hana Blažíková Soprano Recital

演 奏
ハナ・ブラシコヴァ（ソプラノ／ロマネスクハープ）
プレトーク：鈴木優人（“バッソ・コンティヌオ”シリーズ企画監修）

バロックザール
Barocksaal
京都 青山音楽記念館

2025年4月25日（金）19:00 開演
主催：公益財団法人青山音楽財団

気持ちよくご鑑賞いただくために
●写真撮影、録音・録画は固くお断りいたします。●携帯電話の電源、時計のアラームはお切りください。補聴器等をご利用の方は発信音が出ないよう、お取り扱いにご注意ください。またお手回り品など音の出るものの取り扱いはご注意ください。●客席での飲食はお断りいたします。●感染症対策のため、咳エチケットにご協力ください。

PROGRAM

中世ヨーロッパの音楽の旅

ドイツ－カール大帝から宮廷ミンネザングへ

・作者不詳：カール大帝の死を悼む嘆き　*anonym：Planctus de obitu Caroli*

・作者不詳：オルガヌム “この高貴な祝福を” *anonym：organum “In hac excelsa solemnitate”*

・H.v.ビンゲン：ああ、血の赤よ　*Hildegard von Bingen：O rubor sanguinis*

・「ブラヌス写本（カルミナ・ブラーナ）」より “見よ、誠実さは眠り”（ハープ）
Carmina Burana：Ecce, torpet probitas (instrumental)

・H.v.マイセン ‘フラウエンローブ’：ああ、私は玉座で見た
Heinrich von Meissen ‘Frauenlob’：Ei, ich sach in dem Throne

フランス－遠い愛

・マルカブル：昨日、生け垣のそばで（ハープ）
Marcabru：L autre ier josta una sebissa (instrumental)

・J.リュデル：5月に陽の長くなる頃
Jaufré Rudel：Lanquand li jorn son lonc en mai

・作者不詳：ユリが咲いた／・ピエール・アベラール：涙に濡れて、嘆き悲しむあなた（ハープ）
anonym：Lilium floruit / Pierre Abélard：Dolorum solatium (instrumental)

・作者不詳：恵みに満ちたマリア　*anonym：Marie qui gratiam*

・G.リキエ：謙虚で過ちを犯し、非難され後悔している者
Giraut Riquier：Humils, forfaitz, repres e penedents

スペイン－聖母マリアへの信仰篤い歌

・「カンティガス・デ・サンタ・マリア」より “海の底で” *Cantigas de Santa Maria：O ffondo do mar*

・「ラス・ウエルガス写本」より “私はあなたを孤児として見捨てない”（ハープ）
Codex Las Huelgas：Non orphanum te deseram (instrumental)

・「モンセラートの朱い本」より “悦びの都の女王”　*Llibre Vermell：Imperaytritz de la ciutat joyosa*

・「カンティガス・デ・サンタ・マリア」より “人はできない”（ハープ）
Cantigas de Santa Maria：Non pod ome (instrumental)

・「モンセラートの朱い本」より “七つの悦び” *Llibre Vermell:Los set goytxs*

…… 休　憩 ……

新しい様式－イタリア、フランス、ボヘミア王国

・F. ランディーニ：春が来た *Francesco Landin：Echo la primavera*

・「ファエンツァ写本」より “コンスタンティア”（ハープ）*Codex Faenza：Constantia (instrumental)*

・G.de.マショー：やさしい恋人 *Guillaume de Machaut：Doulz amis*

・「フラヌス写本 (Codex Franus) 」より
“主の降誕祭に”（ハープ）*In natali Domini (instrumental)*
“おお、栄光に満ちた聖母” *Ave, gloriosa Virgo*
“花の華”（ハープ）*moteto “Flos florum”(instrumental)*
“この女性は誰か” *Que est ista*

・作者不詳: 愛しい天使 *anonym：Andělíku rozkochaný*

・「ファエンツァ写本より」第41番（ハープ）*Codex Faenza n. 41 (instrumental)*

・「ヴィシェブロト写本」より “オテップ・ミルラ（愛の歌）” *Vyšebrod Manuscript：Otep myrhy*

・P.W.de.グルデンツ：神によって強化され、徳によって洗練された
Petrus Wilhelmi de Grudencz：Prefulcitam expolitam

・作者不詳: 移り気な人々の心よ（ハープ）*anonym：Gentis mens labilis (instrumental)*

・「スペシアルニーク写本」より “めでたし、天の女王” *Codex Speciálník：Ave Regina Celorum*

・ペトル・エベン：リュートのための歌 第5番 “私は恋人を失った”
Petr Eben：Songs to the lute, n. 5 “Stratillať sem milého”

PROGRAM NOTE

ハナ・ブラシコヴァ

ヨーロッパ中世の音楽は、ヨーロッパのすべてのクラシック音楽が築かれた礎石と見ることができる。あるいは、一種の錬金術師の工房のようなものかもしれない。そこでは、最初のヨーロッパの作曲家たち（多くは無名の作曲家たち）が、旋律、協和音、リズム、そして対位法の可能性を探求し、モーツァルト、ベートーヴェン、ドヴォルザークに代表されるような、ヨーロッパ独特の複雑な和声が、やがてこの坩堝（るつぼ）から生まれることになる。しかし、中世の音楽が「本当の」音楽の前触れのようなものであり、より有名な妹のようにまだ少し成長する必要のある不完全なものだという意味にとらえてはいけない。今日のプログラムの各曲は、それが書かれた時代の個人的な証言であり、当時の音楽芸術の絶対的な頂点を表している。最も現代的な技術を駆使しており、当時の耳にはその珍しさが刺激的に感じられただろう。同時に、本日のコンサートでは、10世紀から15世紀までの幅広い時代の音楽を取り上げるため、まったく異なるスタイルの音楽を取り上げる。

ヨーロッパ中世の音楽が、ヨーロッパで最も広く普及している宗教（中世のヨーロッパでは、キリスト教の次にユダヤ教を挙げられるだろう）、キリスト教と非常に密接に結びついていることは、プログラムを見れば明らかだろう。しかし、当時の教育の中心はキリスト教の修道院であり、ここで最初の楽曲が書き留められた。実用的な理由から、主に典礼に付随する楽曲が書き留められ、後に典礼以外の楽曲も書き留められるようになったが、それでも大部分は神聖なものだった。当時はラテン語が教会の唯一の公用語であり、許可されていたため、典礼用の曲はすべてラテン語のテキストで書かれた。国語が典礼に浸透し始めたのは、ずっと後のことである。本日のコンサートでは、ハインリヒ・フォン・マイセンの詩の大曲の一部や、モンセラート修道院所蔵の「サンタ・マリアのカンティガス」や「モンセラートの朱い本」など、神聖な曲でありながら典礼曲ではないものも演奏する。

中世の作曲家のほとんどは作者不詳だが、ヒルデガルト・フォン・ビンゲンやハインリヒ・フォン・マイセン、あるいはトルバドゥール詩人といった例外もある。中世後期になると、ギヨーム・ド・マショーやフランチェスコ・ランディーニのような独創性の高い作曲家が登場し始める。しかし、中央ヨーロッパでは長い間、音楽はほとんどが作者不詳のままだった。

私は、本日のコンサートのプログラムを、作曲された地域によっていくつかのカテゴリに分けることにした。最も古い曲は、冒頭の“カール大帝の死を悼む嘆き”である。西暦814年（ボビオという修道士の作とされている）に書かれたもので、10世紀以降の資料に、ネウマ（後世の記譜法に先立つ楽譜記号）を伴ったテキストが見られる。シャルルマーニュはフランク王であったが、その治世の間に、現在のドイツ領を含む西ヨーロッパと中央ヨーロッパの大部分を統一した。その直後に作曲されたこの曲は、かなり後世のものだが、トランスアルプス地方のもので、中世初期の最も重要な作曲技法のひとつ、いわゆるオルガヌムをよく表している。この用語は、9世紀半ば頃からヨーロッパの資料に現れ始めた、最も初期のポリフォニックな編成を指す。当初、オルガヌムは理論書（Musica Enchiriadis、9世紀後半）に見られ、基本的な声部に加えられる声部の即興を扱い、それは多くの場合聖歌の旋律であった。実際にオルガヌムが最初に登場したのは西ヨーロッパ、主にフランスである。中央ヨーロッパとトランスアルプスの国々では、オルガヌムは12世紀頃から、つまりかなり遅れて世に知られることとなった。“この高貴な祝福を”は、荘厳な主への感謝を表現した曲想で、中央ヨーロッパに由来する。

ヨーロッパで6世紀頃から今日に至るまで、ほとんど変わることなく残っている最も広く普及している音楽形式は、間違いなくグレゴリオ聖歌である。グレゴリオ聖歌は、一部の伝説にあるように、グレゴリオ大王が創作したわけではないが、6世紀末の大規模な典礼改革の背後にいた教皇グレゴリオ大王にちなんで名付けられた。グレゴリオ聖歌は、それまで様々な種類の単旋律のキリスト教典礼聖歌を統合したものであった。ルペルツベルク修道院の修道院長であったヒルデガルト・フォン・ビンゲン（1098～1179）は、この教会の典礼聖歌から様式的な基礎を借りつつも、それを極めて独特なものにし、彼女自身の非常に神秘的なテキストにも曲を付けた（“ああ、血の赤よ”）。彼女の作曲した聖歌が典礼で歌われたかどうかはわからないが、彼女の修道院の尼僧たちがしばしば集まって、楽器（例えばプサルテリウム）を伴奏に聖歌を歌ったという記録があり、彼女の作曲した聖歌の音域の広さと装飾性の高さは、ルペルツベルクにかなりの声楽の名手がいたことを物語っている。

11世紀末から、オクシタニア（現在の南フランス）では、世俗的で上流貴族と結びついた独特の音楽文化が生まれた。トルバドゥール（吟遊詩人）とその女性版であるトロバイリッツは、主に貴族の男女で、詩を作曲し、その多くは音楽を伴っていた。

彼らの詩には、宮廷風恋愛やそれに伴う別離といったテーマが見られるが、戦や騎士道といったテーマも見られる。当時は十字軍が盛んで、ウィリアム10世（アキテーヌ公）やジャウフレ・リュデルなどのトルバドゥールも個人的に十字軍に参加していた。トルバドゥール音楽の伝統の起源はまだはっきりせず、その起源について一致した見解はない。アラブ音楽や抒情詩に触発されたという説もあれば、キリスト教の神秘主義やマリアへの献身に基づくという説もある。最初の “5月に陽の長くなる頃” （ジャウフレ・リュデル（? - 1147頃））は、中世の固定された音楽規則には珍しく流動的な旋法を持ち、その語り手は遠い土地と愛する人を切望している。この曲はまた、「amor de lonh」（遠く離れた愛）という、トルバドゥールの抒情詩の一種の名前の由来にもなっている。曲目は、後期トルバドゥール、ジラウト・リキエ（1230-1292）の謙虚で、過ちを犯し、非難され、後悔している者（マリアへの祈り）で、聖母マリアへの愛と信頼を告白し、その守護と許しを請う。マルカブル（1130-1150年）というトルバドゥールの生涯については、確かなことはほとんど何もわかっていない。“昨日、生け垣のそばで” は、彼の残した4つの旋律のうちのひとつである。

もちろん、トルバドゥールの歌の伝統は孤立したままではなく、12世紀から13世紀にかけて、南フランスから北フランス（後のトゥルヴュールの伝統）へ、そしてイベリア半島へと伝わり、少し形を変えて、ミンネザングという名で根付いたトランスアルペン諸国へと到達した。フラウエンロープは現在のチェコ領に生まれ、一時、自身も熱心な「ミンネゼンガー」であったチェコ王ヴァーツラフ2世の宮廷に滞在していた。フラウエンロープの最も有名な作品である「マリアのライヒ」は、聖母マリアを称賛する長くて複雑な哲学的構成の作品である。今夜は、冒頭の楽章“ああ、私は玉座に見た” のみを演奏する。

“ユリが咲いた” は、フランスのリモージュにある修道院にちなんで名付けられた、フランスのサン・マルシャル様式の例である。サン・マルシャル様式（アキテーヌ様式とも呼ばれる）は、9世紀から12世紀にかけて繁栄し、トロープス、セクエンツァ、特にオルガヌムの作曲によって特徴づけられ、それは、ノートルダム楽派の重要な先駆者と考えられてる。そして、有名な哲学者、詩人、作曲家であるピエール・アベラール（1079～1142）から “涙に濡れて、嘆き悲しむあなた” という旋律を借用した。

12世紀末から13世紀初頭にかけて、パリのノートルダム大聖堂周辺で新しい作曲様式が生まれ、その中心には多声音楽があった。ここではオルガヌムが繁栄し、多声音楽の声部は徐々に4声に増えた。これらの作品は、典型的なリズム構造と華麗な対位法が特徴である。モテットやコンドゥクトゥスといった新しい音楽形式も、この伝統から生まれた。作者不詳の3声のコンドゥクトゥス “恵みに満ちたマリア”は、この様式で作曲されている。

中世のイベリア半島の状況は劇的だ。8世紀初頭以降、北アフリカからの侵略によって半島のほぼ全域が徐々にイスラム教徒の支配下に入り、アル＝アンダルスというイスラム帝国が築かれた。しかしやがて、キリスト教ヨーロッパが北方から領土を少しずつ奪い返し始めた。この過程をキリスト教の視点から「レコンキスタ」（再征服）と呼ぶ。イベリア半島全体のレコンキスタが完了したのは、最後の首長国グラナダが陥落した15世紀末のことだった。この激動と分裂の情勢の中で、13世紀末に膨大なカンティガス・デ・サンタ・マリア集が作られた。これは、啓蒙君主アルフォンソ10世「賢王」（1221-1284） の宮廷で作曲された、聖母マリアに捧げる歌の驚くべきコレクションである。残念ながら、今日のプログラムにはこれ以上カンティガスを組み込むことができなかったが、それらは作曲された時代と場所を反映した非常に独創的な歌であり、西洋の音楽理論と東洋の影響を混ぜ合わせているためである。実際、アルフォンソの宮廷にはアラブやユダヤの音楽家もいたはずである。カンティガスの歌詞は、聖母マリアが行った様々な奇跡を扱っており、しばしば非常に奇妙な物語を含んでいる。「カンティガス・デ・サンタ・マリア」からは、聖母マリアが巡礼の女性を海の深みから救い出す “海の底で” と、器楽のみで奏される “人はできない”を取り上げる。

作曲家の名前が頻繁に欠落しているため、写本は中世音楽における私たちの方向性を見定める上で非常に重要である。
このことは、コンサートの前半で明らかであり、ボヘミアの地に足を踏み入れる後半では、おそらくさらに顕著になるだろう。“見よ、誠実さは眠り” は、11世紀から13世紀にかけての詩や劇のテキストを収めた写本『ブラヌス写本』（『カルミナ・ブラーナ』としてよく知られている）に収録されているカンシオ（歌曲）である。この写本は、放浪者（放浪音楽家）やゴリアール（若い聖職者）による歌を含み、しばしば非常に風刺的な性格のものである。写本には当時のヨーロッパ中の歌が記録されているが、写本そのものはバイエルンで発見された。もう一つの極めて重要な写本は、スペインのブルゴスにあるサンタ・マリア・ラ・レアル・デ・ラス・ウエルガス修道院で制作された13世紀末から14世紀初頭の写本『ラス・ウエルガス写本』である。

この写本には、主にパリのノートルダム派の様式を取り入れた単旋律と多旋律の小品が多数収められており、例えば2声部構成のコンダクトゥス “私はあなたを孤児として見捨てない” などがある。

もう一つのスペイン語写本は、14世紀末の『モンセラートの朱い本』である。この写本には主に宗教的なテキストが収められているが、私たちにとって重要なのは、おそらく巡礼者が使うことを想定して書かれた10編の賛美歌である。2声部構成のモテット “悦びの都の女王” は、当時としては様式的に時代遅れだったかもしれないが、14世紀末にこのベネディクト会修道院でまだ流行していた音楽文化の証拠を与えてくれる。著しく年代が下るのは、15世紀後半の写本であるファエンツァ写本である。そこには、鍵盤楽器のために書かれた現存する最古の作品が収められている。しかしこれらの作品は、フルート、ハープ、フィドル（今日のヴァイオリンの前身）などで演奏されることも多い（“コンスタンティア” ほか）。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

今日のコンサートの後半は、中世後期からルネサンス初期の音楽を取り上げる。まず、フランスとイタリアで新しく登場したアルス・ノヴァの様式（イタリアでは少し違った形で、トレチェント（ Trecento／文字通り14世紀）と呼ばれている）に立ち寄り、それからチェコの地へと移る。フランスでは、アルス・ノヴァの様式は14世紀初頭以降に確立され、主に、より複雑なリズム構造と、楽曲の顕著な旋律性によって表現される。作曲家自身によって書かれた世俗的な詩的テキストも現れ始め、マドリガル、バッラータ（バラード）、レーなどの新しい音楽スタイルも登場し始め、これらは現在私たちが「歌」と考えているものに、より近いものとなった。フィレンツェのフランチェスコ・ランディーニや、特にギョーム・ド・マショーは、ボヘミアのルクセンブルク王ジョン（在位1310～1346）の宰相をつとめ、その生涯はボヘミアとも一部結びついていた。

フランチェスコ・ランディーニ（1325または1335-1397）は、イタリア・トレチェントの傑出した人物である。彼は優れた作曲家であっただけでなく、音楽家（特にオルガンを得意とした）であり、詩人でもあった。スクアルチャルピ写本のおかげで、彼の作品は数多く保存されている。彼の作品は軽快なメロディアスさが特徴で、それは春の訪れを祝うバッラータ “春が来た” にも表れている。

ギョーム・ド・マショー（1300頃～1377）は、おそらく14世紀で最も重要な作曲家であろう。生前、彼は自分の作品がきちんと書かれるように気を配っていたため、非常に多くの作品が現存している。彼の膨大な作品の中から、私は本日のコンサートに、彼の複雑な作曲スタイルをとらえた2声部のバラード “やさしい恋人” を選んだ。2つの特徴的な声部が互いにリズムを補い合い、当時の音楽に現れ始め、ルネサンスの曙を予感させるハーモニーが時折顔を出す。そのハーモニーの主体は、主に三度の音程と、当時非常に人気があった六の和音、そして時折用いられる三和音である。

最後の訪問地はチェコだが、中世のこの地域の状況を少し概説しておいた方がいいだろう。当初はボヘミア公国としてのみ存在し、おおよそ10世紀からボヘミア王国が世襲制で成立する1212年（1198年という説もある）まで続いた。ボヘミア王国（ボヘミア王冠の国と呼ばれることもある）は、中世において重要な領土的存在であり、国王の指導の下に多くの特権を持ち、一時は神聖ローマ帝国の皇帝（1355から死去するまでカレル4世）さえも擁していたが、それでも西ヨーロッパの主要な文化的発展からは遠く離れた国であり、あらゆる音楽的流行は多かれ少なかれ遅れながらこの地に到着した。数多くの戦争、特にフス戦争（1419～1434）は、文化の面でも長い間、国全体を混乱に陥れた。プロテスタントとカトリックの支配が交互に繰り返されたため、宗教的な敵対勢力に似たものはすべて破壊された。とはいえ、私たちの知らない新しい様式は、いつもすぐにこの地に伝わり、古い中世の様式と混ざり合ったようだ。

チェコの中世初期の音楽はもっぱら典礼音楽だが、ここではアルス・ノヴァ時代以降からルネサンス初期までの後期音楽に焦点を当てる。これらの時代の音楽は、いくつかの重要な写本に見ることができる。それらは主に、ヴィシェブロド写本（Vyšebrod Manuscript）、ユィステブニツェ聖歌集（Jistebnice Hymn Book）、スペシアルニーク写本（Codex Speciálník）、フラヌス写本（Codex Franus）などである。

チェコ王国が最も繁栄したのは、カレル4世（在位1346～1378）とヴァーツラフ4世（在位1378～1419）の時代で、プラハはヨーロッパで最も重要な政治・文化の中心地のひとつとなった。もちろん、ハイカルチャーは音楽文化とも結びついており、アル

ス・ノヴァ様式の複雑な曲（“花の華”や、その結果生まれた“この女性は誰か”、“移り気な人々の心よ”）が当時から残されている。

中世のチェコの恋歌はほとんど残っていない。この伝統は、おそらくドイツ系のミンネザングから伝わったものだろう。チェコの恋歌の中から、私は2つの歌を選んだ。短い一曲“愛しい天使”（1396）と、魅力的なレー（中世の俗語による叙情詩・歌曲のジャンル）“オテップ・ミルラ”である。後者はヴィシェブロド写本（1410）に由来し、テキストは雅歌をゆるやかに言い換えている。

15世紀半ば以降、チェコでは典型的なポリフォニーを用いたルネサンス音楽の様式がすでに確立されていた。この時代の多くの写本には、舶来曲と国産曲の両方が見られるが、残念ながら1つの例外を除いては作者不詳である。研究者ヤロミール・チェルニーは、ポーランド出身の作曲家ペトルス・ウィルヘルミ・デ・グルーデンツ（1392～15世紀後半）を特定することに成功した。彼のモテット“神によって強化され、徳によって洗練された”は、すでに初期ルネサンスの音楽実践の一例となっている。

フラヌス写本は1505年の賛美歌集で、当時のフラデツ・クラーロヴェーのウトラキスト教会のレパートリーを写したものである。単声の曲“おお、栄光に満ちた聖母”と、クリスマスのカンティクム“主の降誕祭に”のような多声の曲の両方が収録されている。この同じ曲はスペシアルニーク写本にもあり、フォーブルドン様式、つまり平行する6度の和音を多用する初期ルネサンス様式で書かれている。この様式は主にギョーム・デュファイによって知られるが、例えばイギリスでも非常に人気があった。

スペシアルニーク写本は、中央ヨーロッパにおける中世後期からルネサンス初期の最も貴重な資料のひとつである。この写本は15世紀末のもので、中世後期からルネサンス初期の豊富なレパートリーと、そしてフランドル様式の同時代のレパートリーが収録されている。優美なアンティフォナ“めでたし、天の女王”は、初期ルネサンスの和声的な要素とメロディーの優雅さが特徴である。

プログラム最後の曲は、中世ではなく、チェコの作曲家ペトル・エベン（1929～2007）の「リュート伴奏歌曲集」から。この曲集は、中世のロマンティックな詩に触発されたもので、“私は、恋人を失った”という詩は、“愛しい天使”や“オテップ・ミルラ”と同じ時代からのものである。その雰囲気は本日のコンサートのテーマに近く、どこか物悲しく、過ぎ去った時代の記憶のように幕を閉じる。

本日のコンサートの後半を、レンカ・フラヴコヴァー博士の思い出に捧げたいと思います。
彼女はプラハ・カレル大学の芸術学部で音楽学を専門とし、特にチェコの中世とルネサンス音楽の熱心な研究者であり、私が在学中、中世写本の世界を案内してくれました。彼女は2023年12月21日、芸術学部で発生した学生の発砲事件に巻き込まれ、レンカ博士を含む14名が犠牲となってしまいました。

Profile

ハナ・ブラシコヴァ（ソプラノ、ハープ）　Hana Blažíková（Soprano,Harp）

©Vojtěch Havlík

プラハ生まれ。ジリ・コトーに学び、2002年にプラハ音楽院を卒業。ポピー・ホールデン、ペーター・コーイ、モニカ・マウフ、ハワード・クルックに師事。バロック、ルネサンス、中世音楽を専門とし、その声は「身震いするような水晶の様な透明さ」「輝かしくもニュアンス溢れる響き」（インターナショナル・レコード・レビュー）と評される。バッハ・コレギウム・ジャパン（BCJ）、コレギウム・ヴォカーレ・ゲント、セッテ・ヴォーチ、グリ・アンジェリ・ジュネーヴ、ラ・フェニーチェ、ターフェルムジークなど国際的なアンサンブルと共演するほか、プラハの春、ユトレヒト音楽祭、レゾナンツェン・ウィーン等の欧米の国際フェスティヴァルにも多く出演。ハープの演奏も得意としている。